

須江と秋成てくてく散策

2009.7.26



高 東 庵



須江、秋成概要

安永風土記（江戸期安永6年）によると須江村

須江村

- 田代・畑代—全 69 貫 22 文
 田代 62 貫 359 文 内 15 貫 790 文—御蔵入り
 畑 6 貫 663 文 53 貫 232 文—御給所
- 家数—52 軒
- 人数—248 人 内 男 129 人 女 119 人
- 馬—42 疋
- 神社—新山社（宮田）
- 寺—須江山 高東庵（要害）
- 代数在之百姓—四代 1 五代 1 六代 1 計 3
- 古館—四郎館（根岸） 須江四郎城主 中世末に滅びました。
- 屋敷名—要害屋敷 6 軒 根岸屋敷 5 軒が多く 28 の屋敷名
 ※昔、須恵器を製造した場所ではないかといわれていますが確たる証しがみつかりません。
 ※明治 8 年（1875）町村合併により秋成の一部となり、村名は消滅しました。

現在の字名

北下田・杉山下・田中前・堂林前・西鶴巻・南塩加羅・宮田・迎畑・谷地堰・谷地中・要害前

地名の歴史（主なもの）

- 北下田—最も低い土地で雨が降ると沼となるところ、江戸末期の開拓ランクが下の水田
- 杉山下—風土記によれば白山御林があり杉がたくさん生えていたところ。
- 西鶴巻—昔は川沿いの水田地帯。鶴がよく降りたのでついた名。
- 迎畑—当時村の中心にある要害屋敷の東に大堰があり、その向かいの小高い台地の畑のあった所。現在、林前団地となりました。
- 谷地堰—極端な低湿地の水田地帯。中上野と幅下からの水が集まる場所で水害の常習地。
- 宮田—新山社が祀られており、神社の神領田があったところ。これらの他、谷地中、要害前があります。
 ※胆沢城時代から開拓された場所だと思われていますが、片子沢川や志田見沢川に苦しめられた土地であると思われています。

秋成村（明治 8 年（1875）合併により誕生）堤尻村、須江村、上姉体村が合併

秋成行政区の地名

片子沢・北上野・志田見沢・中上野。幅下・南上野・向田

地名の由来

- 片子沢—片子沢館がありました。片子沢（現大鐘川）は附近の呼び名。（カタクリの群生があったのか？）
- 北上野—根岸の四郎館が中上野で中心地。北上野と南上野があります。
- 志田見沢—古老の言い伝えでは、日照りでも水枯れない沢。わき水（シダレ水）が流れ出る沢。
 その他、中上野・幅下・南上野・向田があります。

※秋成村は明治 22 年町村合併により消滅。

明治 22 年（1889）4 月

中野村、堤尻、須江（秋成村の一部）瀬台野村が合併して真城村となりました。

「秋成村」

秋成村は明治8年（1875）、堤尻、須江、上姉体が合併して生まれました。

北は常盤村、西に小山村と塩竈村に境し、南には、中野村、白山村と接し、東は北上川まで晴の広大な地域でありました。その後度々の合併で、村境の位置は替わってはいますが、以下のような秋成村の記録があります。

村の中心地は、字寺西、字原の下（現在姉体町）で、国道343（気仙街道）に沿って、原の下には高札場（掲示板）があり、寺西にお寺（慈眼寺）、神社（菅原神社）、古館（上姉体城）が紹介され、ほかに瀬台野のうちにお寺（長泉寺）、神社（熊野神社）、修験堂（日光院）があり古館（大柳館）もありました。

片子沢館（半白館）

一、位置（水沢区真城字片子沢）

県道（旧国道）佐倉河・真城線を東に、茂井羅南堰を北にした約20mの高さにある大林寺墓地のある場所です。この地は昔、瀬台野村に含まれていました。

二、規模や構造

現在は、墓地と住宅地になっており、北側にある茂井羅南堰のそばの低地は公園になっています。南側と西側はひらけていて、舌状の台地となっています。

安永6年（1777）瀬台野村「風土記御用書上」（安永風土記—安永六年）によりますと、瀬台野村片子沢館、東西六十五間、南北五十式間とあります。当時をしのばせる遺構として、台地南側の空堀（約30m）と、東側傾斜面の古い石垣だけとなっています。

三、歴史

前述の瀬台野村「風土記御用書上」によりますと、「右御城主井年号共相知不申但当時ハ畑ニ罷成居申候事」と書かれているだけで（封内風土記、胆沢風土聞記など）、古館の存在は認められていますが一切が不明となっています。

水沢風土記第四巻に、片子沢館（半白館）として、半白館の名前の由来（この館に顔の半分が白い狐が棲んでいた）と、葛西時代四百年間続いたのち葛西氏幕下として共に滅びたと書いてあります。（根拠・出典については書かれていません）なお、「葛西氏家臣衆座列」に片子沢氏（館）は書かれていません。推定ではありますが、中世末期に滅びた須江城が約200m南にあったので、片子沢館は、中世中頃には滅びた館ではないでしょうか？

「真城の記録誌」より

齋藤墓地 (大林寺墓地)

齋藤墓地とも言われるこの場所は、曹洞宗森城山大林寺墓地の別名で、東北本線の建設によって町の区画や道路の建設に伴って開かれ、大林寺から最初に齋藤實の墓が移されてから、この名で呼ばれるようになりました。また、生前の春子夫人は、毎月26日に人力車で墓を訪れお参りしていたそうです。



小山崎刑場と 隠し念仏 山崎空左衛門

仙台藩の刑場で、片子沢地内にあります。胆沢地方に多くあった「隠し念仏」にかかわる伝えがあり、布教者であった水沢留守氏家臣山崎空左衛門は、本願寺の寺方より「真宗の教義」に反するものと訴えられ、

また、仙台藩には「犬切支丹」と決めつけられて、宝暦4年(1754)磔刑された所とされます。

また、この法難以後処刑地を小山崎と称するようになったとされ、現在は山崎大導師殉教報徳の碑が建てられています。



卍南無阿弥陀佛



山崎大導師殉教報徳の碑



山崎空左衛門の墓

さらに齋藤墓地には、江戸時代前期に仙台藩伊達家で起こったお家騒動「伊達騒動」で、当事者の一人と言われた原田甲斐(原田宗輔)の妻の墓があります。騒動の後、息子や男の孫たちはみな切られましたが、妻や娘たちは切られず、妻は実家のある水沢に帰り17年後に亡くなりました。

昭和45年(1970)NHKの大河ドラマ「縦の木は残った」(山本周五郎の歴史小説)が放映され、原田甲斐(原田宗輔)を主人公とした物語が放映されましたが、同年に「原田甲斐妻の墓」の碑が建立されました。

また、水沢にキリスト教を根付かせた明治時代初期の宗教家で神学者である山崎為徳の墓地は、京都市左東区にあるのですが、この山崎家の墓には遺髪が納められているそうです。



栗木鉾山株式会社 水沢製錬分工場

栗木鉾山(株)は、明治43年(1910)日本製鉄(株)より分離独立して創設され、今の気仙郡住田町にありましたが、大正6年(1917)11月、輸送や電気などの利便から、水沢の小山崎に精錬分工場が設置されました。戦争中に鉄をつくるため炉を造り、その燃料となる垂炭を江刺の餅田から馬車で運んだといわれ、赤い煉瓦造りの鉾炉支柱基礎は、昭和年代末まで残っていました。



現在は千田善商店(有)の倉庫となっています

鉄道建設と 奥州街道



大正13年頃の姉体道路踏切



昭和52年の様子

東北本線建設の工事は、水沢の町や道路の開発を伴い明治20年(1887)工事が開始されました。

南町を出て堤尻に至る奥州街道と平行する形の鉄道工事は、街道を通行する人馬の危険を避けるための対策もありました。鉄道と街道の間に「せき」を掘り、小山崎あたりからはヒバ垣を植え仕切りました。また、塩加羅付近は湿地帯で、深いせきの状態が続きました。鉄道は、明治23年(1890)11月、一ノ関～盛岡間が開通しています。

東北本線の鉄道が開通のころ、姉体方面への道(通称「姉体道路」)は、南町を出てすぐ鉄道を越える踏切がありました。

昭和52年(1977)7月の「広報水沢」には、当時のものと思われる写真が掲載されています。(左写真)

姉体街道は「藤橋」の完成で気仙沼街道となり、国道343号線が通りました。

写真「広報 水沢」より

須江城(四郎館)跡地

一、位置(水沢区真城字中上野)

奥州市街地の南 1.5km、現在の水沢バイパス南入口付近の国道西面の山裾に見られるのが、昔の須江の集落です。そして、集落の中で一番高い所にある佐藤氏の屋敷付近が城館の跡となります。

二、規模

高さ 15 m、東西 70 m、南北 100 m の丘一帯が城館の跡でありました。しかし、今は佐藤氏屋敷やその他の住宅地及び造成地と変わり、地ならしが行われた関係で、一切がまぼろしの城跡となりました。

ただ、跡地には今でも館のお稲荷さまとして稲荷神社が祀っており、昭和 18 年(1943)神楽を奉納したとされています。また、祠は南と北に 2カ所ありましたが、やはり城跡の高台が宅地に造成されたことにより、現在は 1カ所のみとなっています。

古老の話によりますと、以前は西南部に曲線状に土塁が積まれ、北側には空壕跡も残っていたと言います。おそらく土塁と空壕(水壕)によって囲まれた、楕円形平山城形式のものであったと推定されます。

「安永風土記」には根岸の「四郎館」として、東西三拾間、南北五拾六間とあり、「仙台領古城書上」には、東西二十四間、南北四十五間と記録されています。

(仙台領古城・館 第一巻より)

三、歴史

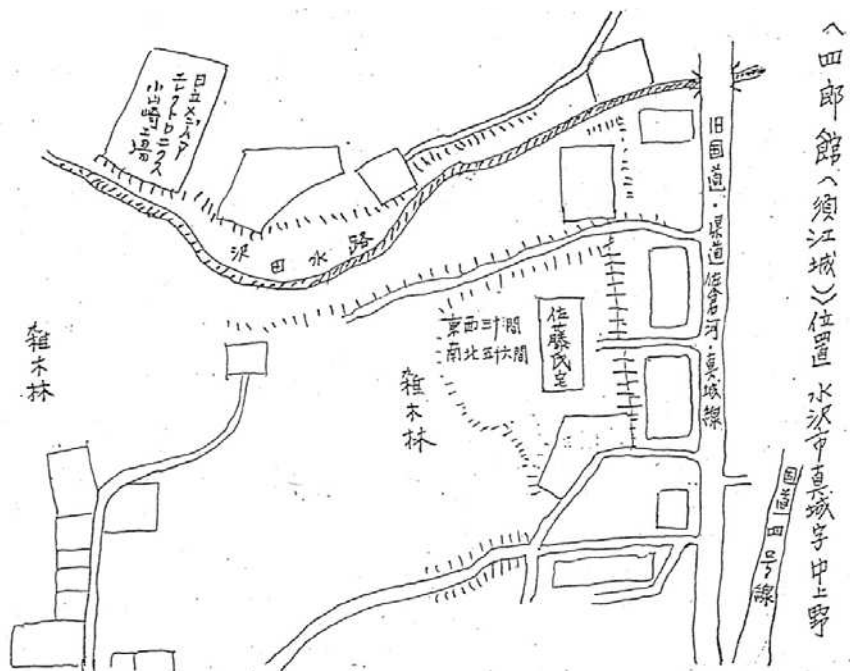
城主は「安永風土記」に須江ノ四郎、「古城書上」には須江の清右衛門と伝えています。「岩手県管轄地誌第六号之十一」によりますと、「「季広館」ト云フ 本村ノ西北字中上野ニアリ 葛西の臣蠣崎季広 天正年間之ニ居レリト云フ」とあります。どのようにしてこの地に住み着いたかは不明ですが、おそらく須江氏が葛西氏の家臣として住んだものと推測され、天正年間の諸戦闘に参加して滅亡したものと思われる。

なお、前述の城主のところで「葛西の臣蠣崎季広 天正年間之ニ居レリト云フ」とありましたが、葛西氏また柏山氏の家臣団の中に「蠣崎」の姓は見あたりません。現在「蠣崎」の姓は、青森県の三戸、八戸地方にみられます。(詳しくは P86 須江城(四郎館)跡地参照)



水沢職業訓練所への上り坂
右側奥に城跡はあります。

「真城の記録誌」より



一里塚（西側）



江戸時代、お江戸日本橋を起点として一里（約4km）毎に、五街道の道の両側に対につくられた土盛りの塚を言います。

この塚は、胆沢郡内に置かれたハカ所の一里塚のひとつで（奥州街道三十番目）、土塁の高さは一丈、面積は三十六坪あり、東側は半分くらいの大きさであったとのことでした。

昭和45年（1970）、水沢バイパスの開通により東側の塚は破壊され、残った西側の一基も落雷で大杉が枯れ、現在は塚の中央に根元部分のみが残された形となりました。

旧胆沢郡で位置が確認できるのは、ここと金ヶ崎の「三ヶ尻」の二基だけです。奥州街道の切り替えが（一部路線変更）明暦4年（1658）頃行われたことから、この一里塚の築造年代は、江戸初期17世紀中頃以降と考えられます。

旧街道



奥州街道は、水沢区折居町から西側の高台を通り、水沢公園の愛宕社参道から袋町に入るルートをとっていましたが、明暦4年（1658）頃、小山崎から山崎町の妙法寺、七軒小路に抜ける道路に切り替えられました。（左の写真は、「須江街道踏切」東側の街道名残）

ブナの大木



水沢職業訓練所に向かう坂の途中にあり、記念物に指定されてはいませんが、水沢区内唯一とされる自生のブナです。樹齢は、約二百年〜三百年と見られています。

堀切段丘 （上野）への街道

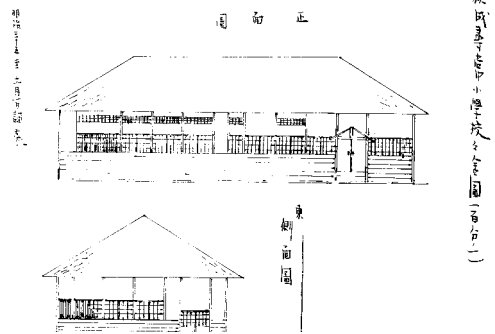
奥州街道が段丘下へ移ってから、上野原段丘へ登る道は多くなく、姉体、中野から上野の開拓のための人馬や荷車の道は、一里塚の北から今の胆江地域訓練所付近に登り、志田見沢川に土橋を架け通行したと思われます。また、土橋は度々流され、改修されたとの伝えがあります。

秋成小学校 跡地

学制が布かれたのは明治5年（1872）。人口600を標準として小学区を定め、区毎に小学校を置くよう小学校教則が発布されました。

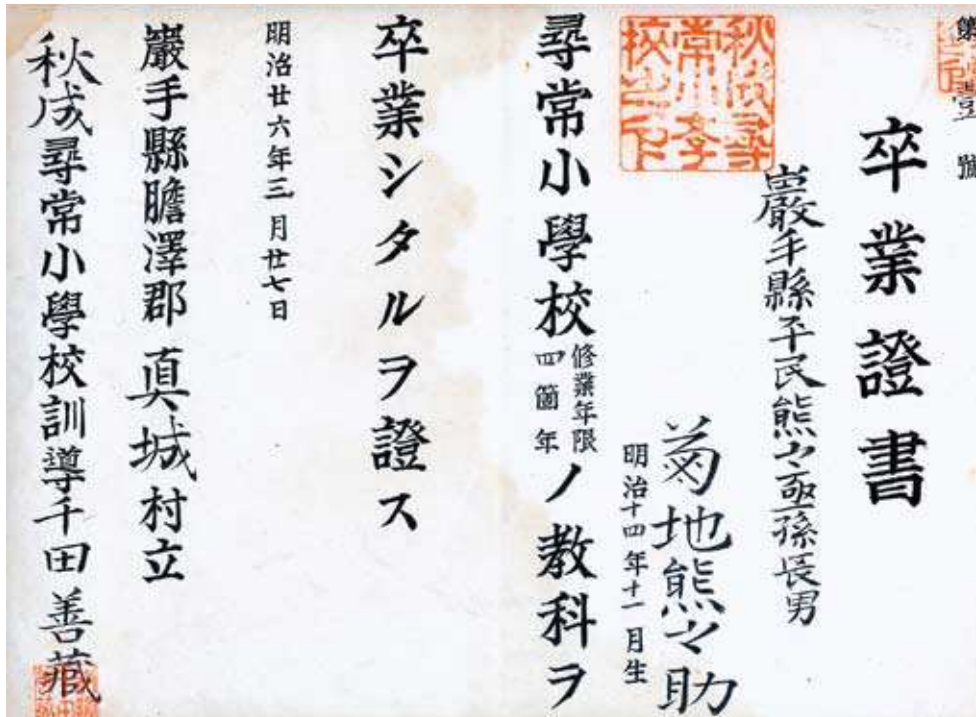
明治6年（1873）中野学区に折居小学校を設置したのを始め、その後秋成村と常盤村にも小学校がそれぞれ設けられました。明治22年（1889）に常盤村、秋成村、中野村が合併して真城村となり、その後中野や折居・瀬台野分校等を経て、明治37年（1904）、真城、中野、秋成、瀬台野各尋常小学校の四校が設置されました。

その後、部落対立や財政上の問題から四校を合併する機運が高まり、大正2年（1913）に新校舎の建設がなされ、四尋常小学校を併合して真城尋常小学校となりました。（折居、中野、瀬台野はそのまま分校として存置）



明治33年 真城村役場学校室帳より
「秋成尋常小学校校舎図」（百分の一）

秋成尋常小学校 卒業證書



資料提供 菊地八郎さん(秋成)

林前 南館遺跡

(所在地 真城字迎畑地内 6,480㎡)

市道秋成本線建設に伴う発掘調査が、現奥州市立埋蔵文化財調査センターによって数年にわたって行われました。

この迎畑は、縄文時代は狩猟場所（陥し穴状遺構21基）として、平安時代胆沢城造営後に計画的に造られた集落（竪穴住居跡23棟、土器溜まり遺構1、井戸跡など）として活用され、中世には遺跡名の方形居館（堀跡、井戸跡、掘建柱建物跡20棟など）としても活用されていたことが解明されました。

平安時代の注目できる遺構・遺物

☆土器溜まり遺構

東西2.05m×南北0.75mの長方形の土壌跡です。

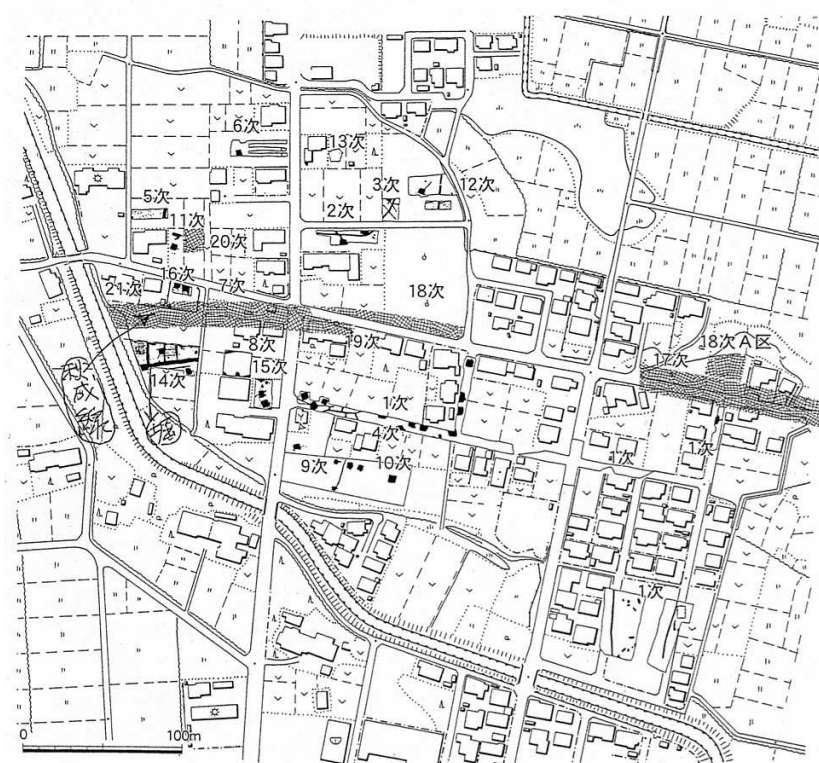
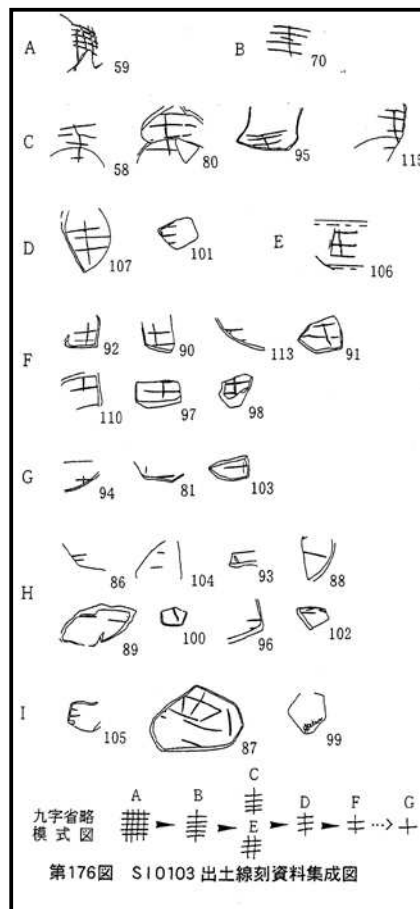
ここから総数40枚以上の土師器杯が4～5枚ずつ意図的に重ねて置かれ、埋葬された状況で検出されました。土器は9c～10c前半のもので、ここは土器の破棄に関わる祭祀的施設として解されています。

☆「九字」線刻土器（東北では初めて出土）

竪穴住居跡の1棟から30点の線刻土器が出土しています。

ここは「九字」に関連した記号を線刻した土器群で、「九字」とは、縦4×横5本の格子に組んだ魔よけ・呪いの記号です。（「臨兵闘者皆陣列在前」＝「臨める兵、闘う者、皆陣をはり、列をつくって、前に在り」の意味）と呪文を唱え、宙に九字を切り（人差し指と中指を伸ばし、ほかの指を丸めて手剣をつくり、空中に縦に4線、横に5線を切ることをいう）邪気を祓います。また、「井」などに省略されて記されることもあり、もとは道家で行われ、後に陰陽道、また密教家・修験者・忍者なども用いました。

出土された「九字」線刻土器



水沢市埋蔵文化財調査センター
調査報告書第16集より

「須江村」

江戸時代以前は、「真城を含む下胆沢」の地区には二十四郷が行政区単位の村となり、伊達藩時代は下胆沢が十五村で、須江村もその一つであったかと思われます。

須江村は、東は北上川の西岸から、胆沢扇状地、堀切段丘にまたがり、古代、須恵器を造る窯があったとされ、須江の地名の由来とされます。今、地図を広げて見れば、広大な地域であったことが想像されます。

須江村の様子が記されている「安永風土記」には次のようになっています。

屋敷の数二十八、家数五十二とあり、外に神社や寺が紹介されています。

その須江村は、明治8年（1875）堤尻村と下姉体村が合併して秋成村となっています。

高東庵



開山は、今から400年位前の慶長2年（1597）、関ヶ原の戦いの頃と言われ、陸中黒石正法寺誌には、元禄の末寺帳（末寺七十八）に須江高東庵と上段の方に記されていました。

開祖は、曹洞宗正法寺十三世良奕大和尚で、この庵に一世として位牌もあります。

しかし、それから280年後、明治13年（1880）に廃寺となりました。

その後は大林寺の檀家となりましたが（過去帳にも記録あり）、昭和初期頃から公葬地となり、どこの檀家にも属さず、現在は116戸の墓地管理組合として、地元の人々に見守られながら存続しています。

新山神社



新山神社は初め字宮田にあり、現在の場所で3カ所目と言われています。この場所へは、耕地整理後、須江分館（現在の須江交流館）と並び移転建設されました。

本尊である新山権現の由来は、延暦16年（797）11月、坂上田村麻呂が征夷大將軍に任ぜられ、兵を率いて栗原に進み蝦夷を打ち破り、敵を追う当地に来た時、護国鎮守のため新山権現天津彦火瓊瓊杵尊を御勧請、ついで大同2年（807）新社を創設せられたとあります。

地元では戦争当時、出征の際必ず新山さんにお参りし、そのお陰で無事帰ってくることが出来たとされ、有り難い神社として今でも地元のみなさんに愛されています。



大林寺墓地を見学する参加者たち

古里の魅力再発見 住民参加し探訪教室

水沢・真城

水沢区の真城地区セ
ンター(佐藤直所長)主催「真城ふるさと探
訪教室」は26日、同地

区内で開かれた。地域
住民ら約40人が参加
し、須江と秋成両地域
周辺に残る名所や旧跡
を巡りながら地元の魅力
を再発見した。

真城の歴史や文化な
どを後世に伝えよう
と、ことしで6回目の
開催。毎回、地域の有
志がボランティアで講
師を務めている。

今回のテーマは「須江
・秋成てくてく散策」。
真城公民館須江分館を
発着点に小山崎刑場跡
や大林寺墓地、秋成小
学校跡、高東庵などを
歩きながら見て回った。

このうち、昨年生誕
150年を迎えた郷土
出身の政治家斎藤實と
眷子夫妻が眠る大林寺
墓地では、講師が「生
前の眷子さんは毎月26
日(實の月命日)に人
力車で墓を訪れ、手を
合わせていた」などと
逸話を紹介した。

真城地区振興会の遠
藤計悦会長(70)は「初
回から欠かさず参加し
ているが、毎回新たな
発見がある」と満足げ
だった。

来年は、旧真城村内
の瀬台野地区を探訪す
る予定。